

るようになった。それが頂点に達したのは、大学に入った年の夏休みだった。そのころ、東京の大学に入っていた A がひょっこり訪ねてきた。久しぶりに彼と話し合うあいだに、私は、あんなに嫌っていた東北の風景や人びとをなつかしく思っている自分に気づいて驚いた。東京にもどってから感じていた「よそ者」意識が、私を岩手に近づけたのである。

白い犬

A のいなかの家では、彼が中学生のころから一匹の犬を飼っていた。彼と再会した翌年の夏、その犬が狂犬病にかかった。ちょうど彼の家に滞在していた A と私は、近所の人びとの要求にしたがって、その犬を保健所に連れていくことになった。だが、人一倍犬をかわいがっていた彼はそれをためらった。自分が愛着をもっている小動物を、他人の手で殺されるのが厭だったのである。ふたりで相談した末に、ある雨の夜、私たちはやせ衰えた狂犬が吠えたり噛んだりできないようにして麻袋に入れると、山のなかに入ってしまった。さほど深い山ではないが、夜は一面の闇である。夜露にぬれて冷えきった手で触れた犬の体が、なまめかしく温かったことをありありと覚えている。

私たちは一夜を明かすあいだに、麻袋に入った生物をどうするか話し合った。睡眠不足で変に頭が冴えたように感じながら、ふたりがたどりついた結論は、自分たちの手で狂犬の命を断つことであつた。機械的に殺すことをこばみつつける A にとっては、それが最善の方法のように思われたのだろう。私も、彼の考えに同意した。

二日めの朝、最初の晩と同じように狂犬を袋につめて棒に吊るすと、私たちは棒の両端を手で支えながら、山道を歩いた。正午近くまで歩きつづけたらうか、ふたりとも二の腕に痛みを感じはじめ、足に豆ができて、それ以上歩くのがつらくなった。麻袋をおろして道端に座りこみ、登ってきた方向を見おろすと、深く切りたった断崖が目に入った。そのとき、ふたりで話し合った訳ではないが、私たちは半ば衝動的に棒を外して麻袋の両端をつかむと、崖っぷちに向かってありったけの力で放り投げた。ふたり以外に誰もいない山あいには蟬の鳴き声だけが響き、シーンとした谷底の方から、麻袋が岩に当たった鈍い音と砕け散った小石がほかの岩に当たる音が低く響きわたった。

ふたりは、しばらくボーッと仰向けに寝ころんでいたが、日没前には山をおりて A の家にとりついた。家の人から犬の行方を尋ねられると、あらかじめ打ち合わせておいたとおり、保健所に連れていく途中で逃げ出し、二日間さがしまわつたが見つからなかったと答えた。まわりの者は誰もそれを信じなかったが、それ以上問いつめることもなかった。それから数日後、私たちは東京に帰った。東京にもどってから、狂犬とはいえ一個の生命を断つたことが、ふたりの頭を離れなかった。それが原因のすべてだったとは思わないが、ふたりのあいだはしだいに疎遠になっていく。

韓国(朝鮮)の風景

なだらかな山なみと、水田地帯をゆったり流れる川——高校生の A が土手に寝そべて空